

# プラトンの政治論

## A Treatise on Plato's Politics

今 井 直 重

### (一) 人 格 論

プラトンは人間、特に人格を愛した人である。人間の人格の中核はロゴスであって、それは単なる人間を人格に高める契機を与えるものである。人格概念にとって理性が不可欠の要素である。人間は生命の根本原理として魂を有するのであるが、その魂は理性を保有するから貴いのである。人間の自由なる行動は、それが理性の指図に従うために許されているのである。理性の指図による自主性において自由は可能である。創造主である神は自己の似姿として人間の魂のうちに理性を与え、この理性こそが人間の人格性を可能にするのであって、理性こそ人間を人格的な、自由な存在にする究極の原動力である。

これについて、プラトンはメノン篇において「すべての人間は同じく善である。なぜならば同じ能力(ロゴス、理性の徳)を具えているからである。それによって人々は善となることができるからである。<sup>①</sup>」

理性によって与えられる徳は老若男女の区別なくすべての人間に平等であって、国家においても家庭においても必要である。理性によって与えられる徳のうちにおいて、正義(δικαιοσύνη)、節制(σωφροσύνη)とは特に必要であって、すべての人々に妥当するものである。プラトンのかかる思想の根柢にはその師ソクラテスの思想、特にダイモニオン(δαίμονιον)の思想が基礎している。ソクラテスはアポロギアにおいて、アテネの市民に対して「私は諸君のすべてよりも唯一の神(δαίμων)に従う」といっている。<sup>②</sup>

この点はプラトンの高弟であるアリストテレスと重点の置き方に間隙が存する。一般に、人格の主体を超越的な普遍性に求める考え方と、人格を社会に内

在する普遍性に求める考え方ががあるが、アリストテレスは実践的なポリス生活における徳に人格の主体を求め、共同体に方向づけられて規定された統一性をもって実践的規範としたのであった。それゆえに実践的にポリス的な市民としての人間像を求めたのである。しかしアリストテレスにおいては総体人格に適合した社会人格とも称すべきものは成立するが、それとは質を異にした内的人格（Inner person）は形成されることができない。内的人格こそ人間のあるべき姿である<sup>③</sup>。真に人間が普遍に通ずる個体であるという自覚をもった人間に形成されるのでなければ、道徳的行為の主体としての人格ということはできないのである。

しかし人間が人間として最も貴い生活をなすことができるのはポリス生活からであることは動かすことのできないところである。勿論人間生活の理想は永久不滅の神の秩序との一体化であり、大宇宙を貫く普遍的理性に没我的に帰一することである。

アリストテレスは実体を三つに分ち<sup>④</sup>、第一は感覚的、実践的質料としての実体で、時間、空間に規定されたもので、今ここにあるという、内的と関係のない外的な規定をうけるものである。第二は形相としての実体であり、形相はプラトンのイデアのごとくに質料とは分離して存在するものではない。第三は形相と質料との結合体としての実体であって、質料的要素が形相によって統一されている。人間はかかる結合体であって個別の実体である。人間が人格であるためには形相と質料とが即応して自己を統一する力がそれに内在していなければならない。形相の要素が多ければ、その純粋性により、質料の制約を脱して、よりよく純粋形相の神に近づくことになる。万物は神にあこがれて動いている。神は自ら動くことなく、神にあこがれて動いてくるものを愛し指図を与えるのである<sup>⑤</sup>。

プラトンはメノン篇において人間をして人間たらしめる徳は国の制度のいかに関係なくそれを超越しているとのべている<sup>⑥</sup>。倫理的行為の主体としての人格はいつも社会的役務に埋没しているものではない。ソクラテスのいったごとく、徳は知である。徳の本質は知でなければならない。プラトンのいうごとく知（ἐπιστήμη）は想起（ἀνάμνησις）である。魂が生前に知っていることを肉

体と統合してから思い出すことである。知はアプリアリなものである。このアプリアリな魂の働きによって永遠の秩序としてのイデア界に帰入することができるのである。プラトンにおいては人間の使命は魂を肉体の桎梏から離脱してイデア界に帰入せしめることである。

(註)

- ① Platon, Menon, 73c.
- ② Idem., Apolo.
- ③ Scheler, Der Formalismus in der Ethik, S. 549.
- ④ Aristoteles, Metaphysica, 1029a, 1042a, 1070a.
- ⑤ Ibid., 1072b.
- ⑥ Platon, Menon, 70b.

## (二) イデア的形成

プラトンは哲学史上最大の哲学者であるが、彼は決して一個の哲学者たることに甘んじなかった。彼の意図したところは哲学者であるよりも哲人政治家であった。彼は彼の青壮年時代における祖国アテナイの民衆政治 (ὄχλοκρατία) や寡頭政態 (ὀλιγαρχία) の自由放任政治や独裁専制政治の国家状態を目のあたりに見て、哲人政治家が出て哲人政治 (σοφοκρατία) を行い、祖国を再建し人民を救済しなければならないと考えた。シンリー行、シラクサ王国再建計画、理想国家建設の夢は雄弁にこのことを物語るものである。彼の知識は論理の知識であるとともにまた実践の知識であった。この点において彼の師ソクラテスの知行合一の流れをくむものである。彼はソフィストたちと異なって、栄世利達のための術知 (τέχνη) を求めたのではなく、道徳的人格形成のための行知 (ἐπιστήμη) を探究したのである。ソクラテスはいかなる方法によって人間の知見 (σοφία) を啓発することができるか、いかなる知識が正しい知識であるかを探究するために身を挺して街頭に立って弁証法的論議をたたかわした。しかしソクラテスは人間個人に余りに捉われすぎたために国家、国政の問題について論究することができなかったのである。ソクラテスは実践力のある生きた修身の先生であったが、齐家、治国、平天下の先生、政治家ではなかった。修身、

齊家、治国、平天下の段階にまで広め高めて論究し、且つこれを実践において示顕せんと企図し、これをもって哲人に課せられた使命であると考えたのはプラトンであった。それゆえにプラトンの哲学の究極の目的は道徳国家の建設である。ヘーゲルは個人より家族へ、家族より市民社会へ、市民社会より民族国家へと哲学的探究を進め、民族国家をもって客観的精神示顕の最高の段階であるとして、民族国家の道義的人格に陶醉したのであった。しかしヘーゲルにはプラトンのごとく自ら理想国家を建設して、修身、齊家、治国、平天下の大望を成就し、哲人王として君臨し、善のアイデアを実現せんとする雄大なる構想も気魄も見出すことができない。この点プラトンはその意気天に沖するものがあり、最高の理論知と実践知を兼備した哲人であったということができるのである。

国家についてのプラトンの構想は単なる理想であって、理想国家 (*πολιτεία*) は実現不可能であるとは決して考えなかった。理想国家は善のアイデアの実現した国家であって、理念国家であるから、善のアイデアの存する限り、人間の魂がこれを希求する限り、必ず実現可能であると信じていた。決して夢を追っていたのでも、ユートピアを描いたのでもなかったことは明らかに看取されるのである。これについてプラトンは次のごとく述べている。遠い過去のあるときにおいてか、また現在においてか、われわれの知らないどこかの地域において、完全なる哲人が必ず国家を支配したであろうとし、また国家を支配しているであろうということについて、私はこれを主張するだけの十分なる論拠を準備している。勿論、このことはたしかに容易なこととは思われないが、しかし決して不可能であると思われないし、むしろ不可能でないと思う。またプラトンは他のところにおいて、われわれがいままで国家と政治について語ったことは決して単なる夢ではない。それは大変に困難なことではあるが、不可能なことではない。<sup>②</sup>

これらの言葉によって考察すると、プラトンは理想国家の形成については相当な困難のあることは予想していたが、その熱意と努力によって建設することは不可能ではないという信念をもっていただことが推察されるのである。たとえプラトンはシシリアのシラクサにおいて、デイオニシオス王を説いて理想国家

を実現せんとして失敗したとはいえ、それは理想型のあるべき国家であるから、現実にある国家をして、将来あるべき国家に形成してゆくことは不可能なことではないと考えたのである。むしろ理念の性格としては、現にあるものを、当にあるべきものへと近づけ発展せしめなければならないのである。理想国家のごときイデア的国家は人間の頭のうちにおいて思考されたものであるから、現実においては世界のどこにも発見されないので、「かかる国家はロゴスのうちに存在し得ても地上のどこにも存在することはないと思う」という友人の反論に対して、「それが現在どこにあるかとか、将来どこにあるであろうとかいうことはどうでもよいことである」と答えている<sup>⑧</sup>。

理想国家は現実であり、また将来あるであろうところのものというよりも、当にあるべきものであって、われわれは努力して、理想国家を単にロゴスのうちにおいてだけでなく、地上にあらしめなければならないのである。これは哲人たる者の使命であるとの信念がプラトンの胸奥にあった。歴史的に、現実的に理想国家が存在したか、また存在しているかということはどうでもよい問題である。理想国家に関しては、その有無の問題ではなく、その建設の問題であり、その形成の問題なのである。

理想国家において、プラトンは、国家のあるべき組織、制度、統治形態、国民の態度、正善の徳の発現方式等あらゆる人間の国家生活の部面にわたって叙述し、現実国家がもって範とすべき国家形成の規準を説いているのである。国家論の問題は現実には国家がいかにあるかの問題、すなわち、事実の問題 (questio facti) であるとともに、国家がいかにあるべきかの問題、すなわち、権利の問題 (questio juris) でなければならない。それは実態調査、観察、実験等によって帰納的に結論を出す問題ではなく、理念的に国家の理想型を構成し、演繹的に現実国家に適用して、現実国家を理念的に形成してゆかなければならないのである。しかし、プラトンは思索が広く深い上に、実践の分野においても広い経験をもち、たびたびの海外旅行、外国巡歴によって外国の国情、政治形態、法律制度にも通暁していたので、比較政治学、比較法学的見地において研究が進められている。ここにプラトンの理論の強味が感ぜられる。

プラトンは当時の諸国の政治形態を比較検討して、いずれにも満足すること

ができなかった。ペルシアの極端な専制政態、アテナイの極端なる民主政態が政態の両極をなすものである。すべての他の国々の政態はこの両極の中間にあるものである。たとえば寡頭政態（ὀλιγαρχία）は専制政態から民主政態へ、またその反対に、民主政態から専制政態への過渡的状態において出現するものである。専制政態の代表的なるものはペルシアであり、民主政態の代表的なるものはアテナイにおいて見られる。これらはいずれも極端に走りすぎて、善いものではあり得ないのである。調和（ἀρμονία）と節度（σωφροσύνη）の徳を尊重したプラトンにとっては、すべて極端なるものは悪しきものであって、悪しき結果を齎すものである。専制政治においては、統治者は自己の名利を求めの余り、国民の犠牲を強いる名利政治（τιμοκρατία）に墮し、名声利欲に駆られて戦争を行い、スパルタのごとき軍国主義を露呈するに至るのである。軍国主義の旺盛であったスパルタにおいては、武人が権力を把握し、武人が統治者に代って統治権を掌握し、他方、産業人、特に農民の土地を掠奪して地主となって物欲を逞しうするに至ったので、国家の正善の組織が破壊されてしまったのである。また民主主義に走ったアテナイにおいては、多数の民衆が一切の国家のことがらについて最高最終の決定権を把握し、愚民の数が国家において最も権威あるものと考えられた。それゆえに、能力や適性は無視され、極端なる平等主義と自由放任主義が行われるに至った。能力を無視した平等、理性の掣肘を受けない自由は放縦となり、恣意（ἀγροος）の赴くままに突進し、統一秩序を破り、社会を混乱の巷に追いやってしまった。一切の政治は衆愚の委任と監督の下に行われ、公務員はすべて抽籤の偶然性と選挙の媚民性に依存して就任したのである。かくして、過度の民主主義はアテナイをしてついに無政府状態に陥れ、これを救済することを名として30人の暴君が肅正にのり出して、暴威を振るい、いわゆる僭主政治（τυραννίς）を出現せしめるに至ったのである。<sup>④</sup>

これらの両極端を避けて、その中間において両者の長所を調和した政態、すなわち、混合政態がプラトンの求めるところであった。専制政態と民主政態の二つの政治形態をある程度において混用しない国家は、よく治められることはできない。専制政治は自由において欠くところがあるが、力においてすぐれている。民主政治は放縦に走りやすいが、自主性（αὐτόνομος）において勝って

いる。それゆえに、これら二つの政態の欠点をすてて長所を混用すれば、力強くして不自由でなく且つ放縱でなくして自主性のある国家を形成することができるのである。<sup>⑤</sup>

プラトンは神話的に最もよく治められた時代を讃えて、現在よく治めんとする国家はその時代を範とすべきことを説いている。プラトンが最もよく治められた時代というのはクロノス (*Χρόνος*) の時代である。いわゆる堯舜の時代ともいうべきものである。法三則にして罪を犯すものなく、疆界三尺にして外狄の侵寇なしという時代である。犯罪者がなかったので刑罰法が必要でなく、存在しなかったのである。神の叡知による統治は、法治主義における法による支配以上によきものである。叡知による統治が行われる国家が最善の国家、正義国家、真の意味における理想国家である。法によって統治される国家は最善の国家の模倣であって、これは次善国家、模倣国家、法治国家である。これについてプラトンは次のごとく述べている。すべてよき国家といわれているものはクロノスの支配した時代の模倣である。われわれは努めてこの黄金時代の国民生活の態度を模倣しなければならない。そうして、この模倣国家において支配するものは、人間でなく法でなければならない。法とは理性の指図に与えられた別名にほかならない。法治国家 (*νομοκρατία*) とはわれわれのうちにある不死なるもの、すなわち、理性が支配する国家でなければならない。統治者とは法に奉仕する人であり、法に奉仕することは理性に従うことにほかならない。正しい理性が神の名に価するものとすれば、法治政治は人間の支配ではなく、神の支配、神の政治である。法が統治者を支配し、統治者が法の下僕である国家にては、神の救を享け、神が国家に善きものを与えるのである。<sup>⑥</sup>

法治国家は混合的である。イデアのごとく現実から超越することによってではなく、イデアと現実との混合によるところの存在である。法治の世界は純粹なるものでなく、イデアと現実との混合的なる存在である。混合とはイデアと現実との混合であるが、イデアが現実を理念化し、現実がイデア的に形成されてゆくのである。すべて実在するものは静止することなく生成発展する。実在への生成発展 (*γένεσις εἰς οὐσίαν*) が存在をして実在たらしめるところの要件である。イデアを含んだ存在が実在であり、真の存在 (*ὄντως ὄν*) である。真

の存在はイデアがあるがために生成発展する。イデアを含まない存在は生成発展しない。真の存在は法治国家において最もよく見られるところのものである。それはイデアを含む存在であるがゆえに混合的であり、イデア的である。それはイデア的に生成発展をつづける動的な存在である。<sup>⑦</sup>

法治国家はイデアと土地と人民と法の四要素の混合（ἀναμειγνύειν）によって成立し、しかもその政態は専制と民主との長所、すなわち、専制の力強い統制力、民主制の正しい自由と自主性の混合したいわゆる混合政態である。生成発展（γένεσις）とは変化（μεταβάλλειν）であり、混合である。無から有をつくり出すことは創造であって、これは人間の世界の仕事ではない。創造の仕事は神のみがよくなし得るところであり、神の世界のことがらであって、人間の世界には存在しないことがらである。人間の世界に存在し得ることは生成発展、すなわち、存在をよりよき状態に進めること、イデアとの混合によってイデア的に変化せしめることである。それは創造ではなくして混合であり生成発展である。これについてプラトンは次のごとくのべている。現在生成し、過去において生成した、未来において生成するであろうところのすべてのものは、人間の魂（Ψυχή）によってか、術知（τέχνη）によってか、必然、自然（φύσις）によってかであるといわれる。水、火、土、空気等の物理的なものは自然から生じたものであり、魂や術知によって生じたものではない。日月星辰は自然によって生じたものであり、自然に動くものである。しかしその運行には一定の秩序があって、この秩序（διαταγή）、すなわち、内的法則に従って春夏秋冬が生じ、その天体の上にそれぞれの物体や生物が生成する。これらのことがらは、人間の魂の働きや術知によるものではなく、自然の働きによるものである。術知は人間的なものであり、芸術において像をつくり、また自然と協力して農産物のごとき有用なるものをつくる。医者は自然と協力して人体の健康をつくり、農民は自然と協力して農作物をつくり、体育教師は自然と協力して立派な体格をつくる。政治も一種の術知であり、自然と協力してよき生活をつくり上げるのであるが、政治は他のものに比して、他のものよりも一層自然が少なく術知が多いのである。<sup>⑧</sup>

プラトンは、政治は術知に関連するものとしてとりあげている。政治は芸術



のごとく模倣ではなく、医術のごとく健康をつくり出す術である。それは国家における健康をつくり出す術である。それは水が流れるような自然の生成ではなく、織匠が経と緯との二つから織りなす織物のごとき製作でなければならない。国家の発展は自然の現象ではなく、人間の形成の問題に関係する。人間の形成こそ国家の発展にとって最も本質的なことがらである。この仕事を担当するものが政治家である。政治家とはイデアによって国土及び国民を正善に形成してゆく仕事を担当する人である。<sup>⑨</sup>

国土及び国民をイデア的に形成してゆくためには知識（ἐπιστήμη）が必要であることは言を俟たないが、知識には批判的なもの、命令的なものがあるが、政治家には力強い命令的な知識が必要である。政治家の命令は他の誰によっても命ぜられないが、自ら他に命ずるところの最高のものでなければならない。政治家は最高の命令的知識によって働き、国土、国民をイデア的なものに仕上げてゆくところの実践力を有する人でなければならない。政治家は実践のともななった行知、実践知を有することにおいて、実践をとまわらない、理論だけで批判をこととする学者よりもすぐれている。政治家はその力強い強制命令を発する点において、ただ単に世人に警告するだけで命令をしない演説家（ρητήρ）に勝っている。また、何故に、いつ命令すべきかを知っている点において將軍（στρατηγός）より遙かにすぐれているのである。<sup>⑩</sup>

プラトンの弟子アリストテレスがのべたごとく、また後にイタリアのマキェヴェリが説いたごとく、政治家は国家の建築家である。建築家は技術的な知識を多く必要とするのであるが、政治家は指導的な知識を多く必要とする。建築家の技術は無生物に対して加えられるのであるが、政治家の術知は指導的なものであって、無生物に対して加えられるのではなく、またただ一人の人間に対してでもなく、多くの人間に対して加えられるのである。政治家は牧人のごとくに人間の群を監督指導することによって国家をイデア的に形成するものでなければならない。政治家の仕事は歴史家のごとく国家の生成の過程をあとづけてのべるものではない。国家の状態を静観して、これを批判するのでもない。国家そのものをイデア的に形成してゆかなければならないのである。<sup>⑪</sup>

プラトンは特に政治家の形成的な意味を強調している。神の世界においては

創造があるが、人間の世界においては形成がある。創造は神の世界において可能なことがらである。これに対して人間の世界においては創造ではなく、人間の国民的・道義的・形成がある。しかし、創造は素材 (*ὕλη*) なくして新しいものがつくられるのであるが、形成は素材なくしては行われ得ないのである。画家にとってはキャンバスと絵具が素材であり、建築家にとっては木材と煉瓦が素材である。芸術家は素材を用いて芸術品を形成してゆくのである。彫塑家は死せる大理石を素材として生きたヴィーナスの神像を形成するのである。画家は死せるキャンバスと絵具を用いて生々として真に迫るような人間や動物や自然の姿を形成するのである。それゆえに、形成とは死せるものから生けるものをつくり出すことである。しかし、建築家の素材として用いる材木は、種子、苗木、小さな木から亭々たる大木に生成発展したので、最初は全く静止せるがごとき状態にあったのであるが、それが次第に動的になり、生気を生み出して発展してゆき、終極においては老木となる。これが自然的生成の過程である。自然的生成においては、不動のものからはじまり、次第に活動が旺盛となり、その極点に達すると下り坂となって次第に活動が鈍り、ついに活動が停止して死滅するに至るのである。しかし、人為的・形成の過程は全く正反対の方向に進んでゆくのである。この点において、人間的・形成と自然的生成とは全くその方向を異にし前者は死より生への方を辿り、後者は生より死への方を辿る。自然的生成の方向は因果的、必然的の前向きの方であるが、人間的・形成の方向は人為的、逆進的の方であるということが出来る。因果的・必然的の生成は神の仕事であって、人間の関与 (*μετέχευ*) の外にあるのであるが、人間的・形成の仕事は人間自身が担当すべき仕事なのである。

政治家の仕事は人間・形成の仕事である。建築家、画家、彫塑家の仕事も人間的・形成の仕事ではあるが、政治家の仕事は国家をイデア的に形成してゆく仕事である。イデアの含まれていない国家は死せる国家である。イデアの含まれていない国家は魂のない国家である。国家は魂によって動くのであるから、国家のうちに活発な魂を育成しなければならぬ。そのうちにイデアが多く含まれると魂の活動は活発となり、国家はイデア的に形成されてゆく。国家のイデア的・形成の仕事を担当するのが政治家である。国家を形成することが人間の存

在の要件である。蟻や蜜蜂が巣をつくること、集団生活を営むことをもって、人間の社会生活に比べられるが、蟻や蜜蜂は自然的生成の過程にあるものであって、イデア的に形成しているものではない。動物はすべて自然的生成の過程にあるものであって、人間の形成とは全く領域を異にするものである。動物と人間との差別は、自然的生成の領域にある存在か、人間的形成の領域にある存在者であるかによって定められることができる。また人間がよく自然の進行を脱し得たのも、よく国家的形成の仕事を担当したからである。<sup>⑬</sup>

（註）

① Platon, *Politeia*, 499d.

② Ibid., 540d.

③ Ibid., 592a.

④ Idem., *Nomoi*, 693e.

⑤ Ibid., 643d.

⑥ Ibid., 715d.

⑦ Ibid., 720ab.

⑧ Ibid., 888e-889d.

⑨ Idem., *Politikos*, 285d.

⑩ Ibid., 260b.

⑪ Idem., *Euthydemus*, 289e-290a.

⑫ Idem., 270e.

⑬ Idem., 320e-321a.

### （三）イデア国家の形成

プラトンの初期の対話篇においてはエロース (ἔρως)、フィリア (φιλία) という語が教育の要素として中心的な地位を占めている。初期の対話篇はソクラテスの教育活動が、個人的に行われ、論破 (ἐλεγχος) とか助産 (μαίευσις) とかが主たる役割を演じている。助産はメノン篇 (Menon)、テアエテトス (Theaetetus) 篇において論ぜられている<sup>①</sup>。しかしプラトンの対話篇が進むにつれて早期の教育活動をあらかず助産も論破的な助産ではなく説得 (πειθω) とか強制

(ἀναγκή) の色彩が濃厚となり、政治的要素が強くあらわれてきている<sup>②</sup>。ノモス篇 (Nomos) において、教育とは法によって正しいとされ、また人生経験豊かな最もすぐれた人々によって真に正しいと認められた教育目標に向って若人を導いてゆくことであるとのべている<sup>③</sup>。真に正しいと認められた教育目標とは何であるか。それはロゴス (λόγος) である。それは人間のロゴスの道徳的主体性の確立である。それは様々な善ではなく、善そのもの、様々な正義ではなく、正義そのもの、種々の徳ではなく、徳そのものが教育の目標である。教育の目標はイデア (ἰδέα) である<sup>④</sup>。

教育の道は愛知 (φιλοσοφία) の道である。それはより善きもの、更により善きものへと開かれている。そのもの自体 (αὐτὸς καθ' αὐτοῦ) への道ゆきは目的論的な展開をするのである<sup>⑤</sup>。

愛知の目的になるものはロゴスによって愛慕 (φίλος) されるもの、すなわち、イデアである。愛慕においてあらわれるイデアは階層的秩序 (Hierarchie) をなしている。魂のうちに情的なもの、知的なもの、意的なものが永遠の姿として照り輝くのである。シムポジオン (Symposium) において愛慕の終局において突如として観照した永遠の姿、美のイデア (καλός) は形相中の形相として形相の階層秩序の頂点に位する善のイデア (ἀγαθός) の観照 (Anschauung) にまで高められるのである。善のイデアはあたかも太陽が万象を眼に見えるようにするのであるが、それ自体は万象の中枢に位し、万象に生成の力を与えるごとく、知られるものに真理を与え、知るものに真理を認識する力を与えるのである。これは究極的実在であり、究極の真理であり、究極を究めんとする者が究極において到達せねばならないところのものである<sup>⑥</sup>。

一般に現象が現象として存在しているのはイデアがその本質として存在しているからであって、それぞれの個物は相対的にイデアを分有 (κατέχειν) しているからである。個々の善なる現象は何らかの仕方で善のイデアを分有することによってはじめて善たり得るのであるから、個々の善をして善たらしめるものは善のイデアでなければならない。それゆえに、われわれの行為をして善たらしめるものは善のイデアである。善のイデアは、すなわち、神 (θεός) であり、それは永遠にして崇高な働く力である。それはロゴスによって認識されるもの

であって、現象の世界における人間から離在して（χωρισμός）存在する永遠の  
 実在である。それは現象的な存在から離れた、それ自体として存在するところ  
 の存在自体（ὄν αὐτόν）である。

感性的な現象的存在から善それ自体を認識することは、それらのものを対象  
 として観照するロゴスの働きに俟たねばならない。ロゴスの媒介を経ない術知  
 （ἀλογη τέχνη）とロゴスの媒介を経た術知（λογη τέχνη）と区別することによっ  
 て、感性和理性、感官と魂の働きに関係づけられる。感官は感性と同義であり、  
 魂は理性と同義である。存在するところのものが明らかにされることができ  
 るのは、魂におけるロゴスの作用によるものである。イデアはただロゴスの推理  
 （διάνοια）によってのみ把握されることができるのである。

われわれは多くの美しいもの、善いもの、正しいものがあることを知るので  
 あるが、美しさそのもの、正しさそのもの、善そのものの存在することを認め  
 る。しかしそれらの多くの美しいもの、善いもの、正しいものは見られるもの  
 であるが、それらは思惟されるものではない。これに対して美しさそのもの、  
 善そのもの、正しさそのものは見られるものではないが、それらは思惟によっ  
 て認識されるものである。

美のイデア、善のイデア、正のイデアそのものは超越的存在であり、それら  
 は一つの理念であるが、それが具体的にわれわれの前にあらわれ、美しいもの、  
 善いもの、正しいものとして見られることができるのは、現象を通してである。  
 表現のない善、美、正は善、美、正自体であっても、あるものの善、美、正で  
 はない。イデア的な善、美、正は現象的な姿、形態、行為、ことがら、事実  
 において、はじめて具体的な善、美、正となり得るのである。それは単に善、美、  
 正を觀賞するものに可能なるものではなく、それらを受するもの（ἔρωσ）にして  
 可能なるものでなければならぬ。善、美、正は単に見て觀賞するのみでなく、  
 見ることによって形づくらなければならないのである。かくて善、美、正は享  
 樂されるものではなくして、愛されるものでなければならぬ。善、美、正が  
 愛であるとは、善、美、正を可視性（τὰ ὄρατά）において表現せんとすること  
 でなければならぬ。善、美、正のイデアを想起（ἀνάμνησις）するのは、それ  
 によって善、美、正なるものを形成する所以である。

このことについて、アイデアの想起はアイデアへの愛である。アイデアの愛は、その具体的な姿を生産（*γένεσις*）することである。愛とは美しいものを生産することである。生産が美しいもののうちに行われるので、美しいものはすべて愛の所産である。美は生産の場所（*τόπος*）であるということができる。見られるべき美のアイデアが、美しい形態となるのは、自己における自己の生産にほかならないのである。美（*καλός*）が愛（*ἔρως*）として捉えられることは、美が生産作用として働くことである。しかし、美のアイデアは単に具体的な美の形態にのみとどまるものではなく、身体的な美から精神的な美へ、精神的な美から観知的な美へと順次愛の途を登ってゆくのである。<sup>⑩</sup>

美の概念は善の概念に従属せしめられている。美のうちにおける生産は、結局は善の所有に向うものでなければならない。美は善のアイデアに達すべき一つの段階にすぎない。あらゆるアイデアは善のアイデアによって包括されるのであるから、美のアイデアも善のアイデアの下に従属すべきものである。善いということはすぐれた能力を有することである。このすぐれた能力が徳である。善きものは事物の自然的性状ではなく、人倫の道徳的価値である。善のアイデアは太陽のごとくに、あらゆるアイデアの統一の中心として、すべてのアイデアを統轄、調和し、人間生活の向うべき方向を指し示しているのである。<sup>⑪</sup>

かくのごとき善（*ἀγαθός*）のアイデアがわれわれの生活において働いているものがよく生きること（*εὖ ζῆν*）である。よく生きるとは適宜なるもの（*πρέπον*）であり、時機に適したもの（*καίριος*）であり、生活に即して善きものである。人間にとっては善き人間ほど貴いものではなく、よく生きるほど価値あるものはない。単に生きることがわれわれにとって貴いのではなく、よく生きることが貴いのである。善のアイデアは単に超越界において、アイデアの統一者としてとどまるのではなくして、現実において生きて働くところの善でなければならない。それは単に理想としてのアイデアではなく、生活実践の指導原理としての善でなければならない。善のアイデアは単に善そのもの、善自体（*τὰ ἀγατά*）としてではなく、善き生活において、はじめて生きた善となり得るのである。すなわち、善のアイデアが超越的存在としての善ではなく、善それ自体としての善ではなく、真に善なるものとして、生きた善であり得るためには、善き生活において、は

じめて可能となり得るのである。アイデアと現象との結合もここにおいてはじめて実現され、知行合一が可能となるのである。<sup>⑬</sup>

プラトンのポリテイアにおける働きは形成 (*δημιουργείν*) である。形成とはアイデアをモデルとして、アイデアを眺めながら、現実と与えられた素材 (*ύλη*) をアイデア的に形成することである。国家 (*πόλις*) は善のアイデアの終局の実現の場所であり、そのうちに善のアイデアが実現しているような理念的な国家を形成してゆくのが政治家の仕事 (*εργον*) であり、形成作用である。アイデアの世界は神の創造によるものである。これを眺めながらもものを制作する人が制作者、形成者 (*δημιουργός*) であり、更にこのものを模倣 (*κάτοπτρον*) して現象界において作る人は模倣者 (*μιμητής*) である。政治家は模倣者ではなく制作者、形成者であり、一般に芸術家やソフィストは模倣者である。制作者と模倣者は峻別されなければならない。しかし、政治家にも真の政治家と偽の政治家とがある。真の政治家はアイデアとしての理念国家を形成するのであるが、偽の政治家はアイデアとしての理念国家を眺めるのではなく、仮象の国家の姿を模写するにすぎないのである。彼は真のアイデアを表現せんとするのではなく、単にその模写を行うにすぎない。これに反して真の政治家は、善のアイデアを明らかに認識して、これを真実の姿において、アイデア的现实国家に形成するのである。それゆえに、制作者としての政治家は自ら働き、自ら創造する人でなければならない。しかし模倣者としての政治家は自ら働き自ら創造することなく、ただアイデアを真似てこれを模写するのみである。アイデアと現実(仮象)の二つの世界に架橋する唯一の道は、この制作者の働く創造力に俟たねばならない。真の政治家は実践的活動によって、超越的なアイデアと現実的な素材とが結びれて、アイデア的现实が創造されるのである。しかし、かくのごとき創造力を有する制作者としての政治家は哲人 (*φιλόσοφος*) であらねばならない。哲人にしてはじめて真の政治家たることが可能である。<sup>⑭</sup>

哲人はアイデアの真の姿を認識する人であり、真に有徳なる人格である。単にアイデアを知るだけではなく、アイデア的に現実を形成することのできる人が哲人なのである。哲人はアイデアをいかにして現実を発現せしめるかについての知識をもつとともに、アイデアの現実への実現者でなければならないのである。

アイデアはそれ自身完全なるものであるが、これを現実の世界において発現し、現象を秩序あらしめ、現象を統一する規準である。しかして、雑多なる現象を統一し秩序あらしめるための規準は数学者の尺度と哲人の良識である。前者は数をもつて秩序を与える測定術に関するものであり、これには数学 (*ἀριθμητική*) と測量学 (*γγομετρία*) がある。後者は人間の行為に関するものであり、人間の行為を規律する規範学 (*νομοθεσία*) である。規範学は現象界における雑多なる人間の行為を秩序づけ統一する規準を立てる学である。哲人の仕事 (*ἔργον*) は善のアイデアの支配するアイデア国家の規準に従って雑多なる社会現象を一定の秩序に形成することである。すなわち、哲人たる真の政治家は領土と人民を含む現象国家をアイデア的規範によって理念国家にまで形成することである。哲人政治家を通じ、超越的存在者たるアイデアは現実の国家に内在し、アイデア的規範に則って理念国家の創造に向わしめるのである。すなわち、現実国家に内在することによって、超越的存在者たるアイデアは、制作者としての哲人政治家を媒介として、現実国家をその非アイデア的現象性からアイデア的理念性へ質的变化を与えて、これを高めてゆくのである。この場合に、アイデアは単なる観念的存在ではなく、現実を測定し、現実を質的に高めてゆく、実践的規範的な働きをもつものである。プロタゴラス (Protagoras 481-411B.C.) がいったように、人が万物の尺度 (*μέτρον πάντων*) であるのではなく、神こそ万物の尺度であり、神を表現するアイデアこそ万物の尺度である。万物を神の尺度によって、アイデアの尺度を用いて、何が善であるか、何が美であるか、何が正であるか、を測るのが哲人でなければならない。しかも哲人は単に抽象的に、善とは何であるか、正とは何であるかを認識するだけでなく、現実の何が善であり、現実の何が正であるかを具体的に規定し、現実の理念化への形成作用を実践するのがその任務である。これには、工匠の制作、芸術家の創作、政治家のアイデア的國家の形成に至るまで、制作には種々の段階があるが、これらの制作のうちで、最も高く、最も貴く、最も美しい制作はアイデア國家の形成である。この高く貴い、美しい制作の仕事を担当するのが哲人政治家である。哲人政治家以外にはかかる仕事を担当する資格がないのである。この意味において、政治家は神意に従い、アイデアを尺度として理念國家を形成することを自己の任務とするものでなければ



ばならないのである。<sup>15</sup>

(註)

- ① Platon, Menon, 82b-85b. Idem., Theaetetus, 149a-150d.
- ② Idem., Politeia, 414cd.
- ③ Platon, Nomoi, 659d.
- ④ Aristoteles, Metaphysica, 1078b 30.
- ⑤ Platon, Lysis, 218b.
- ⑥ Idem., Politeia, 508c.
- ⑦ Idem., Phaidon, 77ab.
- ⑧ Ibid., 66a.
- ⑨ Platon, Politeia, 507b.
- ⑩ Idem., Symposium, 211ac.
- ⑪ Ibid., 206d.
- ⑫ Idem., Politeia, 418bc.
- ⑬ Ibid., 405ab.
- ⑭ Ibid., 415cd.
- ⑮ Platon, Politikos, 283cd.

#### (四) 哲人政治

政治家は国家のアイデアに従って与えられた素材である国土、人民をアイデア的に形成する仕事をする人である。政治家は素材を支配する人であるから、素材の外にあるのである。素材は自然のうちにあるから政治家は自然の外にあるのである。アリストテレスは生成論において素材 (*ύλη*) と形相 (*ειδος*) との関係について論じ、すべては両者によって成っていると説く。全く形相を含まない純粹素材 (*πρωτη ύλη*) は生成しないものである。素材を生成せしめる活動は形相によって行われるのである。それゆえに、形相の要素の多いものほどその活動が活発であり、形相の要素の少ないものほどその活動が鈍いのである。全く素材を含まない純粹形相 (*πρωτος ειδος*) は神であって、動そのもの、原動者 (*πρωτου κινουν*) である。純粹形相である神は自ら動くことなくして他の一切のものを自己に向って動かすところのものである。しかし形相は素材のうち

に含まれて、素材を形相の目指す方向へと生成してゆく力を有するものである。すべての存在はこの素材と形相の二元的要素から成り、形相は素材のうちに内在し、素材をして自己の指向する方向に生成せしめるのである。それゆえに、形相は素材の外にあって素材をイデア的に形成してゆく他律的なものではないのである。<sup>①</sup>

形成は他律的であり、他律的なものには命令がともない、命令には強制が随伴する。しかし、内在する形相の方向に向って生成発展してゆくのは他律的ではなく、自然必然的な発展であって、他律的な形成ではない。形成者は形成されるものうちにあるのではなく、形成されるものの外にあって、これを一定の目的に向って形成してゆくのである。生成は生成するものうちにある能力の自然的な自発自展である。アリストテレスは自発自展の生成論を説き、生成力が外からの力によるものでなく、内在する形相の働きであるとする。プラトンは、形成者は形成されるものの外にあって、これを一定の理念に形成してゆくものであるとする。この点においてアリストテレスの内在論とプラトンの超越論が対立し、アリストテレスの自然的生成論とプラトンの人為的生成論が対照的である。

プラトンにおいては、政治家は現実国家とイデア国家とを対置して、現実国家をイデア的に形成してゆく仕事をする者である。プラトンの法治国家においては支配する者は人間であるよりもむしろ法（νόμος）である。法が国家内の一切のものを支配する王である。国民は国の城壁を守るように国家の法を守らなくてはならない。国の城壁が外敵によって破られると国が亡びるように、法が破られるときに国家が破壊されるのである。自然の世界において、雑多なる現象が生起しているにかかわらず、その雑多な現象を一つの法則によって統一されるように、国家においても、各人の恣意（Willkür）にもかかわらず、自由（ἐλεύθερος）の統制としての法が存在し、その法によって支配（κυβέρνησις）されねばならないのである。もし法がなければ支配者（χάραξ）の恣意によって支配される結果となる。君主政治（βασιλεία）は一人の恣意による支配であり、民主政治（δημοκρατία）は多衆の恣意による支配である。いずれの場合にも専制政治に陥る危険がある。それゆえに国家にとって必要なのは法の支配（νομο-

κρατία) である。<sup>②</sup>

法はロゴスであり、ヌース(νοῦς)であり、理性の命令の表現である。人間は欲情(ἐπιθυμητικόν)の多くの綱によって引きずられている人形のごときものである。しかし、われわれがしっかりと握って離すことのできない黄金の綱がある。これが国家の法である。<sup>③</sup>

法は理性の表現であり、人間生活のあらゆる方面を支配している。それは出生を支配し、結婚を支配し、死亡を支配する。それは感情を支配し、意思を支配し、人間と人間との関係、人間と国家との関係を支配する。法に従って生きることは理性に従って生きることである。法治国家の主体は人間ではなくして、人間の魂のうちなる理性である。人間が法に従うことは、人間が自己自身の理性に従うことである。法が法制定権力者の恣意を表現するものであり、彼らの利益(εὐδαιφίρειν)を保護するものである限り、それは真法ではなく偽法である。暴君政治(τυραννίς)における法、愚民政治(ὄχλοκρατία)における法は偽法である。かかる偽法の支配するところは国家ではなく、単なる人間の集合にすぎない。法は人間によってつくられるものであるが、人間の理性によってつくられねばならない。人間の理性は個人の主観的な個別意思を離れた客観的な人間の公意でなければならない。<sup>④</sup>

しかし人間の行為は無限に多であり、あらゆることがらについて、あらゆる人に共通する単一なる法をつくることは不可能である。人間のことがらは無限に多様であり、生活状態も変化極まりがないので、法はただ一般的な形式を規定しているのみで、これを適用する仕方によって、法は生きた働きをなすことができる。法を生かすか殺すかは法を用いる人によるのである。それゆえに、立法者の立てる法は大体を目当てにした概括的な規定である。それはあたかも医者が旅に出る前に患者に与える養生訓のごときものであって、旅から帰った医者は、病状の変化によって、その処方を変更せねばならなくなる。政治家は成文法は勿論のこと、慣習法のごとき不文法であっても、その時々事情によって、これを変更しなければならないのである。<sup>⑤</sup>

しかし、熟達した医者が患者の健康のため時としては一般的な医療と違って処置することがあるような場合に患者の治療のために役立つことなれば、医師

の一般原則に背いたとしても咎められるべきでないように、それが国民全体にとって福祉を齎すことが多大であるような場合においては、法を破っても国家を救う必要が生ずる。これが国家の緊急権である。国家の安全、国民の福祉のために法があるのであって法のために国家があるのではないから、これを改廃する暇のないうちに国家の危急が生ずる場合は、法を破って国家を救うことは、むしろ知恵ある政治家のとるべき態度である。しかし、通常の場合には、法は固く守らねばならないものである。それは、法はいかなる人よりも賢明であるからである。心すべきことは、法なるがゆえに正しいのではなく、正しいがゆえに法なのであるということである。正義は法の上に位する。法は正義の表現である。正義は法の理念である。正義を認識し、正義を実践し、これを国家において実現するものは人間である。この点において最もすぐれている人が政治家である。これらのことがらには政治家の知恵と徳性に依存するのである。船の舵をとる人が書かれたるもののみを頼りとせず、術をも頼りとして乗客を目的地へ運ぶように、正しい国家には、国家を支配することについての知識と徳を備えた政治家がいなければならない。国家には行知と徳性を備えた政治家が必要である。行知と徳性を備えた人は理論知（*ἐπιστήμη*）にも実践知（*τέχνη*）にもすぐれた人である。

プラトンは政治家に知性と徳性の兼備した人を要求したので、政治家は哲人でなければならないのである。哲人（*φιλόσοφος*）とは知識を愛する人（*φιλόσοφία*）である。それはアイデアを愛する人である。アイデアの表現が真理であり、知識である。真理とは真なるものの認識である。美しい色、形、姿、音の感覚は真なるものの模像（*εἶδωλον*）であって、美それ自体（*παράδειγμα*）ではないのである。感覚の世界に甘んずる人は臆見（*δόξα*）をもつにすぎない。あらゆることがらについて真なるものを認識するのが哲人である。哲人は真理（*ἀληθεία*）を求めてやむことのない愛知者であるが、哲人は専門家ではなく、すべてのことがらについて真理を追求する人である。哲人は常に全体と普遍を求めて止まない人であるから、偏奇、特殊ということなく、理論の世界にも実践の世界にも通じて、探究を怠ることがないから、理論に傾いて実践の力が弱いということなく、また実践に傾いて理論の力が弱いということもない。

牧人は羊の所有者ではなく、羊の世話をする人間である。これと同様に、政治家は人民の世話をすることを任務とする人間である。政治家に与えられた仕事は人民を指導育成して、秩序と調和のある、統一組織をもった、正義が実現せる有徳な国家を形成することである。すなわち、政治家は国家の理念に従って国土、国民を善きものに形成してゆく仕事をなすものである。形成の仕事を担当する人に制作者 (*δημιουργός*) と模倣者 (*μιμητής*) とがある。制作者とはアイデアを見つめながら、アイデア的にもものをつくってゆく人である。アイデア自体は神が創造するところのものであって、人間はただ制作、模倣の原型としてこれを認識する。模倣者はアイデアの模倣を感覚界においてつくる人である。芸術家はアイデアそれ自体を探究することなく、美わしき彫塑、絵画、音楽、建築物を形成する人である。これらの人の形成物はアイデアの模倣にすぎないのである。模倣は真なるものの仮象にすぎないのである。真なるものが明確でないので、模写も正確ではなく、漠然としているものが仮象にすぎないのである。真なるものが明確でないので模写も正確でなく、漠然としているものは仮象であり、模倣である。政治家にも真の哲人と真の哲人でないものとの区別がある。真の哲人政治家は制作者であるが、真の哲人政治家でないものは模倣者である。真の哲人のみが明確にアイデアを認識し、真の国家のアイデアに従って現実の国家を形成することができるのである。偽りの哲人、ソフィスト等は真の国家のアイデアを把握していないので、漠然とした国家の模倣者であって、真の国家の制作者ではあり得ないのである。哲人政治家は理論知と実践知、すなわち、行知を有する人である。特に政治家は実践知が大切であって、アイデアをいかにして現実の国家に実現し得るかということについての知恵がなければならない。政治家の知恵は善悪、正邪、適不適等の判断が正確でなければならない。これは測定術 (*μετρική*) といわれるものである。政治家の測定術は極端に走らない中庸で節度のあるものでなければならない。中庸なるもの (*τὸ μέσον*) を基準としてものごとを測定するのである。すなわち、あることがらを行うについて、そのことがらを行うことが、その場合に応わしいか (*τὸ μέτριον*)、適宜であるか (*τὸ πρέπον*)、時機を得ているか (*τὸ καιρόν*)、また然るべきであるか (*τὸ ζέον*) によって判断し測定する臨機応変の知性がなければならない。これが政治家の実

⑧  
 践知であり、術知である。

政治家の仕事は人間の形成であり、国土と人間を素材として、善き正しき国家を形成することである。これらの形成において、それを可能ならしめているものは、国家の形成においてまた人間の形成において働いているところのアイデアにはかならないのである。超越的なアイデアが形成者を通して形成さるべき国家または人間に内在化されるのである。アイデアはものを形成してゆくとき、素材に対する形相として、すなわち、内在的原理として働くのである。⑨

プロタゴラスは人は万物の尺度であるといったが、人間には千差万別のものがあるから、ものをはかる尺度にはなり得ない。神は善そのもの、美そのもの、正そのものであるから、すべての価値的なるものの基準となることができる。いかなる人間が善であるか、いかなる国が善であるかの価値判断は善美のアイデアである神によってなされねばならない。人間の制作には善きもの美しいものがたくさんあるが、わけても善美なるものは、善美なる人間の形成であり、正善なる国家の形成である。この点において政治家は芸術家に勝っているといわねばならない。この世において美しい人格、美しい国家ほど美しいものはないからである。国家を統治する政治家は知恵の徳を代表するものといわなければならない。というのは政治家の知恵は理論知のみならず実践知をも含んでいるからである。学術的な知識も技術的な知識も含み、しかも熟慮（*εὐβουλία*）の徳が加わったものである。熟慮は国家全体についての全体的普遍的な知見である。勇氣（*ἀνδρεία*）の徳を代表するものは武人（*στρατιώτης*）である。勇氣のない武人は吠えない犬にひとしく、国家の防衛においても、公安の維持においても、国家の奉仕者たることができない。節制（*σωφροσύνη*）の徳を代表するものは産業人である一般市民である。節制とは自制であって、自己が自己を制することを意味する。自己の魂のうちにある理性的なるもの（*λογιστικόν*）が欲情的なるもの（*ἐπιθυμητικόν*）を克服、制御することが節制である。節制の徳は個人の心のうちにおいてのみならず、国家のうちにおいても理性的なる統治者（*χάραξ*）が欲情的なる人民を支配するところに節度のある正しい国家が成立するのである。正義（*δικαιοσύνη*）の徳は一つの階級のみならず、国家全体に関する徳である。正義の徳は他の徳が過不及なく、よく中庸を

得且つよくそれらが調和することによって得られるものであって、諸階級がよくそれぞれの徳を行い、よく調和と秩序を保つときにあらわれるものである。<sup>⑩</sup>

支配者は善き天性を有し、高き教育を受けた少数の人々であり、支配される人は多くの欲望と快楽を求める人々である。支配者である哲人は理性をもち(μετὰ νοῦ), 最高の節制の徳を具え、武人は正しい臆見に導かれた(μετὰ δίκαιης δόξης) 節制をもつ。正しい臆見は慣習と訓練とによって修得された知識であって、最高の知識ではないが、実践知としてあやまりなきものである。武人は統治者に忠順であり、金銭的欲望や肉体的欲望を自制することにつとめねばならない。第三階級たる一般市民は教育の少ない庶民、女子、子供を含む。この階級の者は理知も正しい臆見も不十分なので専ら他律的に規律することによって訓練して節度の徳を涵養するようにつとめしめるのである。かくのごとくにして正義の実現した国家を建設することができると考えたのである。<sup>⑪</sup>

(註)

- ① Aristoteles, *Metaphysica*, 1045a 12-13.
- ② Platon, *Nomoi*, 875a.
- ③ *Ibid.*, 644e.
- ④ Platon, *Politikos*, 294a.
- ⑤ *Ibid.*, 295e.
- ⑥ *Ibid.*, 299c.
- ⑦ *Idem.*, *Politeia*, 516a.
- ⑧ *Idem.*, *Politikos*, 284c.
- ⑨ Aristoteles, *Methaphysica*, 996a 18.
- ⑩ Platon, *Politeia*, 432a.
- ⑪ *Ibid.*, 427c-428a.

## References

- 英 Baker, *The Politics of Aristotle*, 1946, P. 192.
- Burnet, *Greek Philosophy*, 1920, PP. 225-227.
- Calhoun, *Introduction to Greek Legal Science*, 1944, P. 34.

- Glutz, *Ancient Greece at Work*, 1926, P. 152.
- Grube, *Plato's Thought*, 1935, P. 279.
- Hall, *Plato's Legal Philosophy*, 1956, PP. 201-205.
- Jones, *Athenian Democracy and its Critics*, 1953, PP. 1-26.
- Kurt, *The Theory of mixed constitution in antiquity*, 1954, P. 98ff.
- Skemp, *Plato's Statesman*, 1952, P. 52ff.
- Wyse, *Companion to Greek Studies*, 1931, PP. 273-274.
- 独 Bisinger, *Der Agrarstaat in Platons Gesetzen*, 1925, S. 64.
- Gomperz, *Griechische Denker*, 1909, SS. 502-503.
- Meyer, *Geschichte der Altertum*, 1893, II, S. 297.
- Szanto, *Das Griechische Bürgerrecht*, 1892, S. 7.
- Wilamowitz, *Staat und Gesellschaft der Griechen*, 1910, S. 76.
- 仏 Moraux, *La dialogue sur la justice*, 1957, P. 60.
- Vanhoutte, *La philosophie politique de Platon dans les lois*, 1954, P. 238.